

SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

嘘はフィクサーのはじまり

2016年 / イスラエル、アメリカ映画
配給：ハーク / 118分

2018 (平成30) 年 10 月 30 日鑑賞 シネリーブル梅田

Data

監督・脚本：ヨセフ・シダー
出演：リチャード・ギア / リオル・アシュケナージ / マイケル・シーン / スティーヴ・ブシェミ / シャルロット・ゲンズブール / ダン・スティーヴンス

👁️👁️ みどころ

『フィクサー』(07年)では、ジョージ・クルーニーが“もみ消し屋”弁護士役を演じたが、“この世で最もセクシーな男性”に選ばれたリチャード・ギアは70歳近くになって、いかなる“フィクサー”を？思い切って1200ドルもの高級靴をプレゼント(投資)したイスラエルの若手政治家が3年後には首相の座に。そして、自分は“ニューヨークのユダヤ人名誉大使”に！そうなれば、フィクサーの仕事は思うがまま、のはずだったが・・・。

原題は『ノーマン』とシンプルだが、邦題は『嘘はフィクサーのはじまり』と少しおふざけ気味。しかも、チラシには「政治的混乱中の日本に贈る“忖度”悲喜劇」の文字が躍っている。こりゃ一体ナニ？興味深い“コートジュー(宮廷ユダヤ人)”の物語の現代版が、それでは台無しだ。

本作は「リチャード・ギアの最高傑作！」として鑑賞し、しっかり分析したい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■フィクサーとは？その定義は？実像は？■□■

“フィクサー”と聞けば、私たち団塊世代の日本人なら誰でも「ロッキード事件」における、かつての“右翼の大家”で“政財界のフィクサー”と呼ばれた児玉誉士夫を思い出す。しかし、日本では彼以外に“フィクサー”と呼ばれる人物が少ないためか、フィクサーを定義する適切な日本語は定着せず、“黒幕、仲介屋、調停者、事件をもみ消したり裏取引をする人”と翻訳されている。しかし、「フィクサー弁護士」役でジョージ・クルーニーが主演した映画『フィクサー』(07年) (『シネマ19』238頁)では、アメリカの法曹界においては「フィクサー」は「もみ消し屋」の隠語として使われていることが明確にされた。

政財界を巡る汚職やもめ事は絶えることがないから“政財界のフィクサー”は常に存在するはずだが、日本では児玉誉士夫以降、その存在や役割が顕著になったニュースは登場していない。しかし、アメリカでは・・・？

2016年11月の大統領選挙でヒラリー・クリントン候補に勝利し、世界中があつと驚く形で新大統領として登場したトランプ大統領は①TPP離脱、②不公平な関税の撤廃、③メキシコとの壁の建設等の“政権公約”を次々と実現しようとしている。イスラエルのアメリカ大使館のエルサレムへの移転も彼の公約の1つだったが、これは国内ユダヤ人の支持基盤を強化するための。この政策の実現については、娘婿であるクシュナー氏がユダヤ人であることが影響していると言われている。去る10月12日に観た『LBJケネディの意思を継いだ男』(16年)では、ジョン・F・ケネディ大統領の側には常に弟のロバート・F・ケネディ司法長官がついており、副大統領のLBJ(=ジョンソン)以上の発言力と影響力を持っていた。それを考えれば、あながち現在のトランプ大統領とクシュナー大統領上級顧問の関係がダメだとは言えないが、政治家ではなく娘イヴァンカさんの婿に過ぎないクシュナー氏は、あえて言えばフィクサーの一種・・・？

このようにフィクサーの定義は難しいが、原題『ノーマン』、邦題『嘘はフィクサーのはじまり』の本作で、リチャード・ギアは如何なるフィクサー像を？

■□■自称大物フィクサーの実態は？この“投資”をどう見る■□■

リチャード・ギアは“この世で最もセクシーな男性”にも選ばれた二枚目ハリウッドスターだが、そのデビューは1975年で、生まれは私と同じ1949年だから、そろそろ70歳。サラリーマンなら既に定年退職している歳だが、フィクサーも弁護士と同じ自由業だから定年はない。しかし、コートにマフラー姿でハンチング帽をかぶり、ショルダーバッグをたすき掛けにし、耳にイヤホンをさして電話をかけまくっているノーマン(リチャード・ギア)の姿を見ると、そこはかとない哀愁が漂ってくる。

『男はつらいよ』シリーズの“フーテンの寅さん”は毎回定番の同じ服装で登場するが、それはノーマンも同じ。これなら制作費は安上がりだが、それ以上にこの服装だけでノーマンが自称しているような「大物フィクサー」ではないことがわかる効果をもつことになる。全編を通して彼の“私生活”が一切わからないのもフーテンの寅さんと同じだが、金を持っていないのも同じらしい。寅さんはたまに財布から「釣りはいらねえよ」と言いながらお札を出そうとして恥をかくことがあるが、ノーマンにとってもマンハッタン的高级店で一足1200ドル(約13万円)もする革靴を買うのは大変なことだ。幸いカードが決済できたから、彼はイスラエルから講演のためにニューヨークにやって来た若手政治家エシエル(リオル・アシュケナージ)の前で恥をかかずに済んだが、なぜノーマンは分不相応にもそんな高級靴を購入し、エシエルにプレゼントしようとしたの？

本作導入部では、ノーマンの“自称大物フィクサー”ぶりをじっくり観察するとともに、

彼が行ったこの思い切った“投資”に注目！

■□■コート・ジュー（宮廷ユダヤ人）とは？その物語は？■□■

2009年11月9日に厦門（アモイ）都市職業学院で景観法の講義をした私は、アモイ旅行の中で陳嘉庚墓と華僑博物館を見学し、それによってアモイから世界中に渡った華僑たちがどれほど大きな艱難辛苦に耐えて努力し、世界中に自分たちのネットワークを作ってきたかを知ることができた。第二次世界大戦におけるナチスドイツによるユダヤ人への迫害は有名だが、①イエス・キリストの物語や、②モーゼの『十戒』の物語、そして③『屋根の上のバイオリン弾き』の物語等でわかるように、ユダヤ人は国をもたない“流浪の民”として20世紀まで長い間生きてきた。アメリカの“援護”によって1952年にイスラエルを建国することができたのはユダヤ人にとって嬉しい限りだが、対パレスチナの関係はもちろん、これが世界中に大問題を引き起こしたことは周知のとおりだ。

他方、ユダヤ人の自称“大物フィクサー”であるノーマンを主人公とする本作で私がはじめて知った言葉が、“コート・ジュー（宮廷ユダヤ人）”。パンフレットにある①「ノーマン・オッペンハイマーについて」や、②芝山幹郎（評論家）の「灰色の人々とハウリング」、③佐藤唯行（獨協大学教授）の『ユダヤの視点』で本作品を読み解く」を読めば、“コート・ジュー”とは何か、そして、古典的な“コート・ジューの物語”とは何かがよくわかる。ユダヤ人は迫害の歴史の中で強い同族ネットワークを築き上げ、経済・政治・エンタメ界の中心にいるし、ニューヨークは世界金融の中心都市で約145万人ものユダヤ人が暮らし「ジューヨーク」というジョークまであるほどだから、マンハッタンの金融街を毎日闊歩しているノーマンが日夜何を狙っているかは、本作導入部をみればよくわかる。エシエルに高級革靴をプレゼント（投資）する姿をみれば、それがさらによくわかる。

ちなみに、本作の脚本も手掛けたヨセフ・シダー監督は、“宮廷ユダヤ人”について次のとおり語っている。すなわち、

①“宮廷ユダヤ人”の物語の語り口は実に古典的です。ひとりのユダヤ人がある男に出会う。のちに権力を手にするが、その時点ではまだ見分の低いその男に贈り物や恩恵を施す。やがて力を手に入れた男は、ユダヤ人を自らの宮廷に招き入れ、彼は上級顧問官にまで昇り詰める。しかし、その男が王や公爵といった権力の頂点で多くの敵を抱える立場になった時には、彼を容赦なく切り捨てる。自分に不利になるユダヤ人など容易く排除してしまうのです。

また、上記「ノーマン・オッペンハイマーについて」には、それに続いて次のとおり書かれている。

②当時は金融業がユダヤ人の数少ない職業選択肢のひとつであったという事実が、ユダヤ人に専門知識とネットワークの両方をもたらした。彼らは貴族では実現し得なかった方法で金を動かすことができた。それはサバイバルの手段でもあった。

③シェイクスピア「ヴェニス商人」のシャイロク、チャールズ・ディケンズの「オリバー・ツイスト」、ジェイムズ・ジョイス「ユリシーズ」のレオポルド・ブルームなどは、物語は厳密に宮廷ユダヤ人をなぞっているわけではないが、人物像には共通する特徴がある。

すると、宮廷ユダヤ人の物語の現代版であるノーマンの物語の第2章で、エシエルは後に権力を手にするはずだが、さて、その展開は？そして、ノーマンの地位の上昇は？

■□■実業？虚業？私はこの手の男は大嫌いだが・・・■□■

仕事には精神労働 v s 肉体労働、知的労働 v s 単純労働の他、実業 v s 虚業がある。そして、弁護士は実業だが、近時流行のコンサルタントは虚業だと考えている私にとって、フィクサーは虚業の典型だ。そんな目でノーマンを見ると、まさに彼の仕事は典型的な虚業と言わざるを得ない。たしかに情報は貴重だし、時代の変化（進歩）と共にその価値が増大していることはわかるが、それでもホンモノとニセモノの情報を巧みに操って、話術で人を手元に引き込み、他人のふんどしで勝負をして中間マージンを狙うノーマンのやり口を見ているとほとんど嫌になってくる、私はこの手の男は大嫌い！人間的にも尊敬できない人種だと思っている。もっとも、本作にはノーマンの人間性について、儲けに徹したフィクサーか、それとも人間性（良心）の在り方に悩むフィクサーか、の微妙なところに設定してところがミソ。だって、エシエルに1200ドルもの投資をしたノーマンは、その時点では明確な見返りの計算はできていないはずだから。自分は食べるものにもこと欠く中で、あえてエシエルに高級靴をプレゼントしたノーマンの太っ腹（？）に敬服しつつ、この男の人間性をしっかり分析したい。

他方、本作で私が少し納得できないのは、講演の帰り道にブラリと立ち寄ったお店でエシエルが見ず知らずのノーマンから高級靴を受け取ってしまうこと。これは、野望をもつ若手の政治家としてはあるまじきふるまいだ。日本以上に政治家に潔癖さが要求され、“身体検査”が厳密に行われているイスラエルでは、1200ドルの革靴1つで政治家生命が断たれてしまうことだってあり得るはず。もちろん、それを十分承知しているエシエルは何度もノーマンからの申し出を断っていたが、最後にはなぜそれを受けたの？また、多忙な政治家にとって、それはある日のほんの一コマの出来事にすぎなかったはずだが、それから3年後イスラエル首相の座に昇り詰めたエシエルは、なぜパーティの席にいたノーマンを覚えていたの？さらに、あれ以来音信不通だったノーマンをエシエルはなぜ感激した面持ちで抱きしめ、“ニューヨークのユダヤ人名誉大使”に任命するとまで公言したの？

マンハッタンのお店での一瞬の出会いとそこでのノーマンの“投資”がここで大きな成果を生むことになったわけだが、これはノーマンにとっても想定外のこと。これによってノーマンに大きな幸運が舞い込み、さらに大物フィクサーになるチャンスが訪れたわけだが、さあこれから、ノーマンはどうやって“泳いで”いくの・・・？

■□■中盤にみる、ノーマンのフィクサーぶりに注目！■□■

わずか3年の間に政敵を次々と蹴落として首相の座に上り詰めたエシエルが、誰をモデルにしているのかはわからないが、今どきエシエルのような政治家はいないのでは・・・？それはともかく、一方では中東の和平の使者たる自分の理想を語り、他方では現実政治の中で妥協の必要性を強調するエシエルの姿は、私にはかなり違和感がある。また、妻や側近に見せる素顔と国民やマスコミに対して見せる姿との乖離も私は気に入らない。そして最も気に入らないのは、“ニューヨークのユダヤ人名誉大使”に任命したノーマンに対して、自分の息子をハーバード大学に裏口入学させたいと頼むことだ。もっとも、これは“宮廷ユダヤ人の物語”の現代版である本作の中盤で、ノーマンの大物フィクサーとしての有能さを見せつけるためのテクニックでもあるのだが、それでもその“厚かましき”は如何なもの・・・？また、本作には宮廷ユダヤ人の物語らしく、ユダヤ人のラビであるブルメンソール（スティーヴ・ブシェミ）が登場し、礼拝所が売却される危機に対応するためノーマンに助けを求めるストーリーが描かれるが、そこでのノーマンの働きは如何に？さらにノーマンの良さ理解者であるユダヤ人弁護士フィリップ（マイケル・シーン）が再三ノーマンの甥だとその身分を詐称する形で紹介されるが、彼がノーマンに依頼するのは、韓国人女性と結婚するための宗教上の諸問題をラビに解決してもらうこと。そんな難問にノーマンはいかに対応するの？

これらの諸問題をうまく仲介し、各当事者が満足できる結果に導くのがフィクサーたるノーマンの役割だが、そこで役立つのが“ニューヨークのユダヤ人名誉大使”の肩書きであり、エシエル首相の名刺だ。ノーマンの服装は3年前と全く変わらないが、その取り扱う業務はケタ違いに増大したはず。それと共に、ノーマンの収入も増大したはずだ。さあ、本作中盤では、ノーマンがみせる大物フィクサーぶりに注目！！

■□■この女検事に注目！危ない会話にも注目！■□■

本作はイスラエル・アメリカ映画だが、使われる言葉は英語とヘブライ語。エシエルはもちろん英語がペラペラだが、それでもやはりヘブライ語の方が得意らしく、時々側近に「〇〇は英語で何というの？」と質問している風景が興味深い。また、日本人にはさっぱりわからないが、本作の登場人物たちの“出自”をたどってみるのも面白そうだ。そんな視点で私がビックリしたのは、イスラエル法務省の女検事アレックス役をイギリス人女優シャルロット・ゲンズブールが演じていることだ。私がこの女優をインプットしたのは、デンマーク生まれのラース・フォン・トリアー監督の『アンチクライスト』（09年）で、全裸も厭わないで熱演をしていたためだ（『シネマ 26』83頁）。同作は、「2009年カンヌ映画祭最大の衝撃！」「称賛と嫌悪が物議を醸したエロティック・サイコスリラー」と言われた映画だが、そこでのシャルロット・ゲンズブールの演技には、園子温監督の『恋の罪』（11

年)『シネマ 28』180頁)における女優神楽坂恵と同じくらいビックリさせられた。

そんな女優が本作では何故かイスラエルの女検事アレックス役で登場し、列車の中でノーマンと危ない会話を交わすシークエンスが登場するので、それに注目！そこでの会話ははじめて会った男女のものとは思えない濃密なもので、ノーマンはつい「〇〇さんを今度紹介するよ」と3度も言ってしまったらしい。さらに、彼女がレズビアンで女性のパートナーがいることまで聞き出してしまったからすごい。もっとも、さすがアレックスは女検事だけあって、その直後にノーマンのインチキ性に気づくうえ、本作後半からエシエル首相を襲うあるスキャンダルにノーマンが関係していると気付くことに・・・。

おっと、そんなネタバレは厳禁だからこれ以上書けないが、本作では『アンチクライスト』で衝撃的な演技を見せた女優シャルロット・ゲンズブールが演じる女検事アレックスに注目！そしてまた、ノーマンとアレックスとの間で交わされるレズビアン問答を含むアブナイ会話にも注目！

■□■ “忖度” 悲喜劇という宣伝文句は、あまりに安易！ ■□■

本作のチラシには、「リチャード・ギアが今の日本に贈る“忖度” 悲喜劇」「政治的混乱中の日本に贈る“忖度” 悲喜劇」の見出しが躍り、「存在を認められたい！偉い人と繋がりたい！大金を手にした！そんな万国共通の欲望を笑い、自省したくなるブラックすぎる忖度コメディが、いよいよ日本上陸」と解説されている。これは、近時大きな話題となった安倍晋三首相と昭恵夫人の“モリカケ問題”に絡めた宣伝文句だが、本作に見るノーマンのフィクサーとしての働きを“忖度” 悲喜劇と表現するのは如何なもの？政治家のカネにまつわるスキャンダルは古今東西山ほどある。そして、本作後半はエシエル首相に訪れるスキャンダルがストーリーの軸となって、ノーマンとエシエル首相との友人関係(?)にいかなるひびが入っていくのかがポイントになるが、それをモリカケ問題と同じように捉え“忖度” 悲喜劇と表現するのはあまりに安易すぎる。

ノーマンもエシエル首相がスキャンダルに巻き込まれた相手である“ニューヨークの某実業家”とは誰かについていろいろ調べていたが、未だその情報には辿りつけていなかった。そんな中、一度列車の中で一緒になり、危ない会話を交わしただけの、あの女検事アレックスの元を訪れると、そこでは何とも意外な問題提起が・・・。政財界の“フィクサー”と呼ばれた児玉誉士夫はロッキード事件で重要な役割を果たしたが、さてエシエル首相を巡るスキャンダルで大物フィクサーたるノーマンはいかなる役割を・・・？ちなみに、“モリカケ問題”では財務省近畿財務局で森友学園への土地売却の交渉を担当していた男性職員が死亡(自殺?)したことによってより問題の深刻さが顕著になったが、さてノーマンはエシエルのスキャンダルの中でいかに泳ぐのだろうか。それを、あなた自身の目でしっかり確認してから、本作の面白さをじっくり味わってもらいたい。

2018(平成30)年10月31日記